年　組　名前

道新でワークシート

無人機（左）と有人機の2台が同時に作業するクボタの自動運転トラクター（同社提供）

自動運転トラクター　来年度にも本格販売

クボタなど農機メーカー3社が自動運転トラクターの本格販売に向け準備を進めている。各社は2018年度をめどに本格的な販売を予定。高齢化が進み、後継者問題に直面する農家の人手不足を補うとの期待は大きく、政府も導入を推進していく方針だ。

クボタは6月、日本初となる自動運転トラクターの試験販売を始めた。衛星利用測位システム（GPS）を使い農機の位置を把握。現在は人が肉眼で監視する必要があるため、1台に人が乗り、無人のトラクターと2台同時に走行させる使い方などを想定している。クボタの飯田聡専務は2台一緒に作業した場合、「（3千～5千平方㍍の農地で）作業時間を約3割短縮できる」と話す。

ヤンマーや井関農機も開発を急いでいる。ヤンマーは、日本版GPS実現を目指して6月に2号機が打ち上げられ、18年度に運用が始まる準天頂衛星「みちびき」に期待。精度向上で使いやすさが高まり、農家の作業効率が上がれば、普及にとって強い追い風となりそうだ。

クボタの自動運転トラクターの価格は、1台970万～1100万円（税別）。現行の約1・5倍だが、普及とともに価格は下がるとみられる。

２０１７年７月２７日朝刊経済面

①このトラクターは、２台同時に走行する必要があります。なぜですか。

②このトラクターは、農家が直面するどのような問題に対応することが期待されていますか。